

延慶本における人物対比の方法

——宗盛像をめぐる——

宇野陽美

はじめに

『平家物語』研究においては、所謂、説話的形成論が近年の主流を占めてきたが、その一方で物語固有の構想や人物像等に對する文学的な評価の問題が等閑になる傾向にあったことは否めない。近時の佐伯真一氏^①、生形貴重氏や武久堅氏^②の指摘は、説話的形成論の克服が『平家物語』研究の大切な課題であることを示唆している。本稿は、平宗盛の人物像をめぐる、延慶本を出来る限り一貫した物語的脈絡において読み、その作品としての可能性を求めることを目指すものとする。

宗盛の人物像については、従来、兄重盛との対比から、人間的・政治的資質に関して事実以上に否定的に描かれた人物であると考えられてきた^③。彼が否定的にのみ描かれているのではないとする説が

現れたのは、宗盛の否定的評価が論じられて後十年近く経ってからで、それは、重盛亡き後朝家の為に奔走する忠誠の厚さ、弱者への思いやり、子息への恩愛の情深さなどを評価し、宗盛を人間味あふれる優しい性格であるとするものであった。その後「あきれたる宗盛」に着目、再び宗盛像の否定的側面を論じたのは山下宏明氏である^④。氏の論は、諸本論が展開する研究状況にあって、物語としての人物像をいかに評価するのかがという研究方法の問題提起であり、従来の宗盛論がその評価の基準として用いた「否定・肯定」という評価に対しても、疑問を投げかけるものであった。更に、宗盛論の課題を「『平家物語』の編著者による著述記事と、編著者の手に落ちる以前の伝承譚・伝承物語の識別と、伝承部の担い手あるいは生成母胎の問題である」とし、宗盛を呼称別に四期に分けて考察したのが武久氏である^⑤。氏は人物像造型と『平家物語』の構想との関わ

りにについても考察し、著述部の宗盛像の分析により、

この編者を仮りに作者と称すなら、この作者は、清盛以外では宗盛に限ってその官位昇進を年代的に追跡し、物語化し、この物語の前半から後半まで通して登場する唯一の人物として宗盛を位置づけた構想力の人と評さねばならない。

と語り、宗盛を一貫する中心人物と見立て、その宗盛像を次のように追求している。

平家物語における宗盛の存在は、清盛在世下はその横暴のかげで賢兄重盛に対比される軽薄な愚弟であり、嘲笑と誹謗の対象であった。後半生は、安徳帝と一族の女性集団を擁して苦難の都落ちを率いた退嬰的消極型の総帥であり、積極型武将弟知盛を対位者として、末路は、自ら父子恩愛の小世界に逃げ込むことを通して衰亡期平家の悲傷を一身に体现した悲劇の主人公であった。

宗盛は、非常に複雑に、様々な伝承を絡み合せつつ作者によって作り上げられていった人物であった。その点で、宗盛はその生涯において平家の盛衰を全て体験する存在として、物語の作者から、大きな興味をもって眺められ、作為によって歪められつつ造型されたと考え得るであろう。右の論考で武久氏は、延慶本の宗盛の記事を、著述部と伝承部に分けるといふ氏独自の方法で検討し、宗盛像を考

察した。その論考は、今日の宗盛論の到達点ともいえよう。が、延慶本の宗盛像の造型を、人物対比に注目して検討すると、その叙述の一貫性に関して、更に述べ得る事項があるのではないか。本稿では、武久氏の考察をふまえつつ、延慶本において人物対比構成を持つ宗盛関連記事を、読み本系では主に長門本・源平盛衰記・四部合戦本、語り本系では覚一本・屋代本・百二十句本をも視野に入れて検討し、延慶本における宗盛像を考察したい。

1 並記される重盛と宗盛

——一門を象徴する存在——

「平家物語」中の宗盛の人物像について語られる時、賢兄重盛との対比的描写に触れられない事はないと言える。宗盛は、兄重盛と対比され、「兄にはことのほかに劣りたる」者（巻三「法皇被流」）と語られる。この愚弟或いは劣者宗盛の側面は、川田正美氏が述べたように、物語の生成過程で拡大・増幅されていったようである。

延慶本における宗盛像もまた、賢兄に対する愚弟の様相を呈するのは免れない。しかし、延慶本には重盛と宗盛が並記される箇所は十三あり、この全てが賢兄重盛に対する愚弟の宗盛像を表わしているわけではなさそうである。

そこでまず、重盛と並記されつつ、劣者として扱われない宗盛が

示す姿とは何か、又、重盛より劣る宗盛を描く事で、延慶本の中の宗盛像が示すものは何かを考察してみよう。

延慶本において宗盛が重盛より劣る者として扱われず、ただ並記されるのみであると考えられる記事は七記事ある。

それらは、^①「第一本 五 清盛ノ子息達官途成事」・^②「第一本 七 義王義女之事」・^③「第一本 三十 重盛宗盛左右二並給事」・^④「第二本 八 中宮御産有奉 付諸僧加持事」・^⑤「第二本 十一 皇子親王ノ宣旨蒙給事」・^⑥「第二中 三十二 入道登蓮ヲ扶持給事」・^⑦「第五末 十八 那智籠ノ山臥惟盛ヲ見知奉事」^⑧の七記事である。

まず^④には、左大将に重盛、右大将に宗盛が任じられた事に対して、殿上の交わりさえも嫌われた人の子孫が左右の大将に兄弟並んで任じられるのは、不思議だという記事がある。この記事は対照諸本に共通して見られるが、重盛と宗盛を比較する記事というよりむしろ、重盛・宗盛を列挙して、清盛以下平氏一門の栄華を象徴的に表わしていると考えてよいであろう。

^⑤には、祇王から仏御前に心変わりした清盛が、仏御前を慰める為に再び呼び戻した祇王を、一長押下った場所に据えた事に対して、「重盛宗盛」下ノ人々目モ当ラレスシテサハカリカタフキ申サレケレトモ不力及」と記される場面がある。これは、「覚」^⑨「百」では仏

延慶本における人物対比の方法

御前がとりなそうとするが力及ばないという記述であり、「長」^⑩「一盛」^⑪「四」には該当する本文はない。ここでも「重盛宗盛」は「已下ノ人々」つまり、平氏一門を代表するものとして並記されているだけで、両者を対比させようという意図は見られない。

^③では、叙位除目が平家の思い通りになり、右大将の重盛は左大将に、次男宗盛は数輩の上臈を超えて右大将になったとして、「嫡子重盛ノ大将二成給タリシヲコソユ、シキ事二人思ヘリシニ二男二テ打ツ、キ並給世ニハ又人アリトモミエサリケリ」と記される。

右の引用部分は「長」^⑫「四」にはあるが、語り本系には見られず、又、「一盛」では清盛の権勢をより詳細に記した記事となっている。

これを武久氏は、宗盛が「二男」であることを強調していると読み、「この「二男」の意味を、『軽視すべきもの』と規定している」^⑬と述べるが、ここでは前後の物語の文脈からして「世ニハ又人アリトモ見エサリケ」る清盛を、子息達の異例の官位昇進によって表わそうとした記事だと解釈することができるのではないだろうか。長男だけでなく次男までもが「打ツ、キ」要職についてた事で、清盛以下一門が、栄華を極める有様を表現する記事だと考えるのである。とすれば、ここでもやはり、宗盛は重盛と並んで平氏一門を象徴的に表現していると考えられる。

^⑬には、中宮の男子出産の際に、「思ワスナリケル事ハ……(中

略)……優ニヤサシカリケル事ハ小松ノ大臣ノ御振舞本意ナカリケル事ハ右大将ノ籠居出仕シ給ハマシカハイカニ目出カラマシアヤシカリツル事ハ……(中略)……ヲカシカリケル事ハ……」とそれぞれの人々の反応を幾つか列記した記事がある。

これは、重盛の振舞いと宗盛の籠居を対比し、皇子誕生という晴れの場での両者の対照的な有様を描いてはいるが、両者の人間的な優劣を示す文章ではない。むしろ平氏一門の様子を描くに際しては、重盛・宗盛を並記しようとする意識が働いてのものであろう。

しかし、右の記事は「長」「盛」では同様に扱われているが、「四」では様々な出来事の列記という形式でなく、宗盛不出仕の理由とそれに対する感想を記すだけである。そして、語り本系は、重盛・宗盛の二人だけに關する記事となり、「兄弟ともに出仕あらば、いかにめ出たからむ」(卷三「公卿揃」と、まるで兄弟が揃わなかった事が宗盛の過失であるかのように描くのである。

前の三例同様、この記事に關しても、「延」「長」「盛」が語り本系に比べて、平氏一門を表わす為に宗盛を重盛と並べて記す傾向が強いと言えよう。更に、語り本系に見られる宗盛への批判的表現は、宗盛の否定的側面を諸本の展開の過程で増幅した、後次的な改編であると判断し得るのではないか。

◎では、徳子の産んだ皇子(後の安德帝)が皇太子の宣旨を受け

る。「親傳ニハ小松内大臣、大夫ニハ右大将宗盛卿、權大夫ニハ時忠卿ソナラレケル」と延慶本には記されている。「長」だけが同記事を掲げるが、「覺」には「傳には小松内大臣、大夫には池の中納言頼盛卿」とあり、「屋」「百」は、「傳に小松内大臣」とだけ、「四」は「右大将宗盛、大夫にぞ成りたまひける」とだけ記している。

ところで、『玉葉』治承二年十二月十五日条に引く「坊官除目」では、

東宮、

傳從一位藤原朝臣經宗兼左大臣

(中略)

春宮坊、

大夫正二位平朝臣宗盛兼大納言右大将

權大夫從二位藤原朝臣兼雅兼中納言

(以下 略)

とある。「延」「長」は、重盛と經宗、時忠と兼雅とを差し替えているが、それは平家の權勢を象徴的に示す意図によるものであろうか。更には、後の安德帝が、皇太子の時点で既に平家の血脈から出た王として平家一門に擁護されているかのように描かれていたとも言えるだろう。「四」が宗盛の記事のみに絞って事実を伝えているのは、

平氏の栄華を表現しようとする意図よりもむしろ、史実に重きを置いたのか、或は「一四」自身に宗盛に対する何らかの意識が働いていたのであろうか。また、「一屋」「二百」の、経宗と重盛の差し替えと宗盛の消去や、「一寛」の、同じ差し替えと、宗盛と頼盛の差し替えについては、宗盛を重盛より劣る者として描く意図が働いた故と考えられるだろうか。

①では、秋津の里の美しい景色に感動した清盛が連歌の発句を詠んだが、「嫡子重盛次男宗盛侍二ハ越中前司盛俊上総守ナト並居テ付ントシケレトモ時剋ハルカニ押移……(中略)……付申人無リケリ」とある。

これは対照諸本には見られぬ延慶本独自の記事である。この記事でも宗盛は「次男宗盛」と呼ばれてはいるが、重盛と並記されて平家の公達を代表している。

②では、戦場離脱した維盛が那智山に詣でた際、維盛を見かけた山伏の一人が、安元二年、法住寺殿で催された法皇五十の御賀の有様を知っていて、その様子を回想する言葉の中に、「父ノ大臣ハ内大臣ノ左大将ニテ左ノ座ニ着座伯父宗盛ノ右大将ハ右ノ着座セラレキ」とある。「盛」は重盛・宗盛の他、知盛その他の公達についても言及するが、「一四」は「父の大臣殿は公卿の中にも勝て見えたまひき。舍弟宗盛卿は左衛門督にて御ましが立たまふ」と重盛の優

れた姿を強調し「一屋」は重盛の事のみを記す。「一寛」「一長」にいたっては、宗盛は「階下に着座せられたり」(巻十一「熊野参詣」と、重盛より劣る姿を強調するかのよう)に描かれている。これらと比較すると、延慶本の記述は、「一盛」のように公達の幾人かを列記する事なく、又、「一四」「一屋」「一寛」「一長」のように程度の差こそあれ宗盛を重盛よりも劣る者として描く事もなく、重盛・宗盛を並記して、平家の公達の有様を総て語るに代えていると考えられるのである。

以上、七記事に諸本比較を通して考察を加えた結果、重盛と宗盛の名が並記される記事の中には、宗盛を重盛と対比させて重盛よりも劣る者として位置づける事を意図しない記事も存在し、それは語り本系より読み本系に、更には長門本や源平盛衰記や四部合戦状本よりも、延慶本に多く見られることがわかった。又、その記事は、諸記録・文書・史料を単に記載したというだけのものではなく、そこには延慶本の作者と呼べる存在の、構成に関わる意図が窺えるようである。

即ち、平氏一門が関わる事件や行事に対して、重盛と宗盛の名を並記する記事は、重盛と宗盛の二人で平氏一門全体を象徴的に表わす傾向が強い事を示している。換言すれば、延慶本は平氏一門を象徴的に表わす場合に、重盛・宗盛を並記するという文体を意識的に用いるということである。つまり延慶本の作者は、宗盛の人柄如何

に拘らず、重盛の生前、即ち物語の当初から、宗盛を兄重盛と対等に並記すべき一門の代表者格の一人として扱っていると考えられる。更に想像を逞しくすれば、清盛以降の平氏一門に、重盛達小松家の流れと、宗盛以下の流れをすでに見ていると考えられるのではなからうか。

2 重盛死後——劣りたる宗盛——

「第二本 二十 小松殿死給事」には、重盛死亡記事の後に、次のような記述がある。

前右大将方サマノ者共ハ世ハ大将殿ニ伝リナムストテ悦アヘル
輩モアリ

延慶本はこの記事以後、つまり重盛の死後、宗盛の行動を生前の重盛の行動と対比させる時は必ず、宗盛を劣る者として描く。これは延慶本が物語構成上、重盛存命中は、前節にみたように宗盛と重盛と並記し、同等に扱って平家一門を象徴的に描き、重盛の死後、宗盛の実体を徐々に露呈させる形で宗盛の劣る姿を描くことによつて、何かを表わそうとしていると考えられるのではないだろうか。劣者宗盛の姿は、既に重盛の父への教訓の場面にも伏線的に描かれる（第一末 十八 重盛父教訓事）。では、重盛の死後、なぜ宗盛は重盛よりも劣った者として、描かれねばならないのだろうか。

劣者宗盛の記事を全て延慶本と共有するのは、長門本のみである。そこで、この「延」「長」の記事を他の諸本と比較してみたい。

延慶本の中で、重盛と対比させて劣る宗盛を描こうとしている意図が明白にあらわれていると考えられるものは、次の三記事である。

第一は「第二本 三十 法皇ヲ鳥羽ニ押籠奉ル事」で、法皇を鳥羽殿へ幽閉する執行人として、清盛の命を受けた宗盛が参上する。

法皇は「宗盛モマヒレカシ」と宗盛の随行を望む様子を見せるが、宗盛は「入道ノケシキニ恐レテ」参上しない。延慶本は、この後に、「其二付テモ法皇ハ兄ノ内府ニハ事ノ外ニ劣リタル者カナトソ思食サレケル理ナリ」と語る。この引用部分に関してはほぼ同様のものが見られるのは「寛」「長」だけである。「盛」「四」「屋」「百」では、法皇は重盛の事をしのぶだけで、宗盛を兄に比して「事ノ外ニ劣」ると注してはいない。

第二は「第二中 十一 高倉宮都ヲ落坐事」で、頼政と共に平家追討を企てた高倉宮は、「打死」の風聞の流れる中、都を脱出する。

大政入道ノ嫡子小松内大臣重盛去年八月ニ失給ニシカハ次男前右大将宗盛ニワク方ナク世間ノ事譲テ入道福原へ下給タリシ手合せニ大将不覚シテ宮ヲ逃シマイラセタル事口惜トソ人申ケル
「長」「盛」「四」が右の引用文をほぼ同様に記す。

第三は「第二中 二十九 源三位入道謀反之由来事」である。延

慶本は、高倉宮・頼政の謀反の原因となった宗盛・仲綱の馬争いの顛末を記し、それと極めて対照的な、重盛の宮中蛇出現の際の冷静な振舞いと仲綱に褒美として馬を与えたという親密な触れ合いを描く。¹⁵⁾この記事の最後に、「誠ニ難有カリケル小松殿ノ御心ハハ哉哀

レ御命ノ長ラヘテ世ノ政ヲ助マシマサンニハイカニ世間モ穩ヤカニ国土モ静ナラマシト万人惜奉ルト云ヘトモ甲斐ナシ」とある。延慶本は対照的な構成をもって重盛・宗盛を対比し、重盛を賞賛するという形で、人心の、平氏からの離反を描くが、「覚」[百][長]

「盛」は、ほぼ同様の記事を載せながら、「小松おとゞはかうこそゆ、しうおはせしに、宗盛卿はさこそなからめ、あま(ツ)さへ人のおしむ馬こひと(ツ)て天下の大事に及ぬるこそうたてけれ」(巻四「競」とする。つまり「覚」[百][長]「盛」は、重盛との対比を明瞭にし、宗盛の行為が高倉宮・頼政の謀反の原因であったとして、宗盛批判に重点を置いているのである。また、「四」は宗盛の記事だけに止まり重盛については記されていない。こういった他諸本に対し、延慶本は重盛と宗盛の比較による人心の離反を何と明確に記していることであろうか。

以上の三記事の検討により、延慶本の宗盛の描き方は、次のように構成されていると言えよう。即ち、重盛の死後、宗盛はまず法皇から、重盛に「劣リタル」者と見切られる。更に、高倉宮を逃して、

「口惜」と人に言われる。この事で一番「口惜」く思うのは、やはり平氏一門であつたらう。従つて宗盛は、法皇の次には、身内周辺の人間から「劣者」と見切られるわけである。そして、宗盛は馬ゆえに、天下を騒がす大事件の火付け役となる。この時、都の中を宗盛の名札を付けた馬が疾走したと、延慶本は記す。この為、都中の人々がその事情を知る。延慶本の、重盛が生きていたら云々という手厳しい締めくくりは、宗盛が重盛より劣るということが都に住む人々にさえ露呈した事を示している。

延慶本においては、宗盛は重盛の死後、重盛より劣る者である事を、《法皇↓平家周辺の人間↓都の人々》と、内側から徐々に知らしめていくような構成がみられる。そして、それが文覚の「平家ハ世末ニナリタリ」(第二末 七 文学兵衛佐ニ相奉ル事)という判断と、次に挙げる言葉へと結論されていくことは、物語の構成上極めて興味深い。

大政入道小松内大臣コソ謀モ賢ク心モ強ニテ父ノ跡ヲモ可継人ニテヲワセシカ小国ニ相応セヌ人ニテ父ニ先立テ被失ヌ其弟アマタアレトヲ右大将宗盛ヲ始トシテ有若亡ノ人共ニテ一人トシテ日本国ノ大将軍ニ可成ス人ノミヘヌヤ

「盛」や語り本系に右の言葉が見られないのは、宗盛が最初から重盛よりも劣る者として描かれる事が多かった為に、改めて文覚にそ

れを語らせる必要性がなかったであろう。延慶本の文覚の言葉が、右に見た構成で描かれた宗盛像をふまえていると考えると、延慶本編者の長い構想力が感じられる。

延慶本においては、宗盛は、重盛存命中、重盛と並記される事で平家一門を象徴し、重盛の死後、兄重盛に対比されて、劣者の側面を露呈する。そしてそのような物語的状态に至って、平家の「世末」が文覚の言葉によって明らかになる。この記事構成は、延慶本が、清盛没後の平氏一門を、重盛及び小松家の人々の流れと清盛の後を引き継いだ宗盛及び一門の人々の流れをともなつて、眺めていたことを暗示してはいなかったろうか。

3 知盛と宗盛——滅びを招く宗盛——

「第三末 二十二 大臣殿ノ御所へ被参事」では、夜更けに建礼門院のもとを訪れた宗盛が、「都ニテ最後ノ合戦シテイカニモ成ムト被申人々モ候へトモ……」と、都落ちの相談をもちかける。この「都ニテ最後ノ合戦シテイカニモ成ム」という主張をしたのは知盛であった。この知盛が、都落ち以降壇浦入水まで、宗盛と対比される。清盛没後、平家の総大将として都落ちを実行し、平氏一門の人々を壇浦での入水、或いは生け捕りの運命へと導いてしまう宗盛の姿を浮き彫りにする為に、物語の作者は知盛を配置したのである。

「第二末 二十六 頼盛道ヨリ返給事」では、頼盛が都落ちの途中、都へ引き返してしまふ。長年の重恩を忘れるような者は捨て置けと強気の宗盛も、この後、小松家の者がまだ一人も来ないという状況の中で、心細げに涙を落す。その宗盛を見て、知盛は、

是日来皆思儲タリシ事也今更驚ヘキニアラス都ヲ出テ未タ一日
ヲタニモスキヌニ人ノ心モ皆替リヌ行末トテモサコソ有ラムス
ラメ我身一ノ事ナラネハスミナレシ旧里ヲ出ヌル心ウサヨトラ
シハカレレ只都ニテイカニモナルヘカリツル者ヲ

と述べる。「我身一ノ事ナラネハ」という知盛の言葉があるのは「延」だけである。延慶本では、都落ちの理由として知盛は、この「我身一ノ事ナラネハ」に拘り、後にも「只都ニテ打死ニモシテ館ニ火ヲ係テ塵灰トモナラント思シヲ我身一ノ事ナラネハ人並々ニ心弱クアクカレ出テカ、ル憂目ヲミルコソ」(第六本 一 判官為平家追討西国へ下事)と、再びこの言葉を口にする。延慶本においては、この「我身一ノ事ナラネハ」が都落ち承諾となる言葉であったのだが、この言葉は何を意味していたのだろうか。

例えば、「第三末 二十八 筑後守貞能都へ帰り登ル事」では、都での決戦を進言する貞能が、宗盛の前で馬から降りて膝まづき、アナ心ウヤ是ハイツチヘトテワタラセ給ソヤ都ニテコソ塵灰ニモナラセ給ワメ西国へ落サセ給タラハ遁サセ給ヘキカ又平ニ落

付給へシトモ覚候ワス落人トテアシココ、ニ打散シテ骸ヲ道ノ頭ニ暴シ給ワム事コソ心ウケレコハイカニシツル事ソ新中納言殿三位中将殿トクトク引帰ラセ給へケウカル軍仕テ後代ノ物語ニ仕り候ワム弓矢ヲ取習敵ニ打ル、事全ク恥ニアラス何事モ限有事ナレハ今ハ平家ノ御運コソ尽サセ給ヌラメサレハトテ叶ワヌ物故ニ敵ニ後ミセム事ウタテク候と説く。この貞盛の言葉は、「延」「長」にのみ見られて、語り本系や「盛」には見られない。

都での決戦を主張する武士であれば抱くはずの心情を簡潔に言い切った貞能のこの言葉を、居残りを希望しながら都落ちを余儀なくされた知盛を始めとする人々が、いかに無念の想いで聞いたかは想像に難くない。実際、貞能の呼びかけを聞いて、知盛は宗盛の方を「ニラマヘテ誠ニ心ウケニ思給」い、都落ちに反対する気持を隠さない。しかし、宗盛はこの貞能の言葉に代表される武士達の交戦論に、「貞能ハイマタシラヌカ……（中略）……各カ身一ナラハイカ、セム女院二位殿ヲ始奉テ女房共アマタアリ忽ニウキ目ヲミセム事モ無慚ナレハ一マトモヤト思フソカシ」と反論し、都落ちを実行したのである。

この宗盛の反論は、朝家の護りを第一とする平氏一門の人々を理性的に説得するものだったことに注意したい。知盛の言葉や宗盛の

反論中の「我身一」或は「各カ身一」として行動できる者とは、知盛や宗盛個人を指すのではなく、戦うことに己の「生」を燃焼し得た一門の武士達であつたろう。宗盛の判断は、平氏一門が武士達だけの構成ならば都で決戦もできようが、安德帝や女院、二位殿や女房達などをも抱えるために、都落ちをせざるをえないというものであつた。武士の感情に訴える貞能の進言に対し、理性的に反論するものとして宗盛の言葉を位置づけた「延」「長」は、武士の感情よりも朝家の護りにとらわれる宗盛像を、他の諸本よりも強く印象づけている。三種の神器を帯した安德帝の存在によって、一門の存在が保証されるのであるから、その幼帝を守る女院や二位殿を中心にした女房達の集団を見捨てる武士の感情におぼれることは、宗盛にはできなかったに違いない。

貞能は、「弓矢ヲ取習ヒ妻子ヲアワレム心タニモ深ク候ヘハ思キラレス候」と、宗盛の論理とは真つ向から対立する言葉を残して、都へと引き返して行く。武士は、たとえ相手が安德帝、女院、二位殿であつても、「思キ」る事が大切だとする貞能の言葉は、この後、物語の重要な所で「思キ」る事ができた人間と、それができなかった宗盛とを描き分けていくことになるのである。

さらに人物構想の問題として気をつけたいのは、貞能が都での交戦を主張するに際し、宗盛の前に膝まづきながらも、知盛や重衡に

向かって呼びかけている事である。貞能の言葉に応ずる人間とは、武士の情を持つ人間であり、貞能が宗盛ではなく知盛・重衡に懇願するように語ったと描く「延」「長」は、平氏一門の武門としての側面を、知盛・重衡の存在に象徴している事を示すのだと言えよう。つまり、貞能・知盛・重衡を宗盛に対比させるように並記する事により、宗盛を、総大将ではあるが武士の情において行動し得ない人間であると描くのである。

こうして都落ち以後、宗盛は主に知盛と対比的に描かれ、知盛の武士らしく振舞う姿に対して、武士らしくない姿をさらしだす。

「第四 三十四 木曾八嶋へ内書ヲ送事」では、孤立を深めた義仲が、平家との和睦の内書を送る。これを見た宗盛は非常に悦び、二位殿も同意しようとするが知盛が反対する。

縦故郷へ上タリトモ木曾ト一二成テコソトソ人ハ申候ワンスレ
頼朝カ思ワン所モハツカシク候弓矢取ル家ハ名コソ惜候へ君カ
クテ渡セ御ワシマセハ甲ヲ抜キ弓ヲハツシテ降人ニ參ルヘシト
返答可有

同記事が見られるのは、「長」「盛」であり、「弓矢取ル家ハ名コソ惜候へ」という記述がないのが「覚」「屋」である。「延」「長」「盛」においては、知盛の言葉に「弓矢取ル家ハ名コソ惜候へ」とあることで、宗盛が、既に「弓矢取ル家」の棟梁たる自覚を忘れて

しまっている姿を強調する結果となっていると言えよう。

更に「第六本 十五 壇浦合戦事 付平家滅事」では、知盛が合戦前に兵を集めて激励し、阿波民部重能の叛心を見抜く。重能を討とうと進言する知盛に対し、宗盛は、真偽を確かめるため、重能を召喚する事にした。知盛は「新中納言ハアワレアワレト度々宣テ成良ヲ召ス」と描かれる。この「アワレアワレ」と言う知盛のつぶやきを描くのは、延慶本のみである。この「アワレアワレ」は、取り返しつかない宗盛の甘い判断を前にした、知盛の痛恨のつぶやきであろう。重能の裏切りが、壇浦合戦の重要な展開部として位置づけられる事については、刑部氏も指摘しているように、物語において平家の運命を決定するものであった。他の諸本に見られない、知盛の「アワレ」というつぶやきは、知盛が総大将宗盛の武士としての能力を見切ったものであり、後の戦いの結果を既に物語っている。「思キ」る事を「習ヒ」とした武士の生き方を、放棄した総大将を持つ武士集団の運命は、一つしかなかった。

眼前に一門の滅亡の現実を見て「哀レ新中納言ハ能宣ツル物ヲ」と後悔する宗盛とは異なり、知盛には後悔の詞は既がない。女房達に戯れ言を話しかけ、船を浄め、自ら鎧二面を身につけて、乳母子家長と共に入水する。同じ敗戦を、惨めに生け捕られて迎える宗盛に比べて、「思キ」ることのできた武士らしい身の処し方であった。

知盛と宗盛は、こうして対照的に配され、「弓矢ヲ取習」に生き
た人間とそれを放棄した人間との陰影を鮮やかにした。しかもその
傾向は延慶本により強く表われ、語り本系はむしろ知盛の英雄ぶり
を強調する傾向にある。知盛の人間像が「弓矢ヲ取習」を示す役割
を担うとするなら、延慶本は、総大将として「弓矢ヲ取習」を放棄
した宗盛の存在に平家滅亡の因を見ていると考えられるのではない
だろうか。語り本系が清盛の悪行に滅亡の因を集中するのに比して、
延慶本の場合、滅亡の運命に宗盛の人間像は極めて深く関わってい
ると言えるであろう。

4 清宗と宗盛——恩愛の人・宗盛——

宗盛の子息清宗の名が最初に登場するのは「第二中 二十三 大
将ノ子息三位ニ叙ル事」であるが、父宗盛の捕られ以前には、登
場人物としての清宗には、延慶本は特に着目しない。都落ち以後
時々その名が記される事によって、彼が父と行動を共にし、安徳帝
や女院たちと同船していた事がわかる程度である（第五本 二十一
越中前司盛俊被討事）。

ところが、この清宗の存在が、壇浦での知盛の死後徐々に変化し
てくる。

「第六本 二十一 平氏生虜共入洛事」を見ると、宗盛以下生け

延慶本における人物対比の方法

捕られた人々が入京し、大路を人目にさらされて牛車で渡る記事が
ある。この時宗盛は浄衣を、清宗は白い直垂を着ている¹⁷⁾。これは、
各々浄衣を着ていたとする「一盛」以外の、諸本が一致するところだ
である。清宗の着ている直垂は武士の平服であるが、宗盛の浄衣とは
白い狩衣の事で、狩衣は公家の常服である。共に装飾を許さず、
白をさせられたのだろうか、武士の平服に身を包んだ清宗と公家の
服装をした宗盛を同席させる事はどのような効果を持つであろうか。
しかも宗盛は「四方見回シテイタク思沈タル気色ハオワセス」と描
かれるのに対し、清宗は「ウツフシニテ目ヲモミ上給ワス深思入給
ヘル気色也」と描かれている。この諸本共通の対照の示すものは何
であろうか。

右の記事を皮切りに、清宗は益々宗盛と対比されて描かれるよう
になる。「第六本 二十九 大臣殿若君二見参事」では、鎌倉下向
直前の子息能宗との再会が描かれる。対面後、宗盛から離れようと
しない能宗の姿は涙を誘うが、この時、涙に咽ぶだけの宗盛に対し
て、「今夜ハ是二見苦事ノアランスルソ帰リテ明日参」と能宗を宥
め諭すのが清宗である。

又、「第六本 三十三 兵衛佐大臣殿二問答スル事」では、藤中
から「生ムヤ思食ス死ントヤ思召ス」と尋ねる頼朝の言葉を伝えよ
うとした比企能員に向かい、宗盛は「居直リ畏テ聞」く。宗盛のこ

の態度はどの諸本もほぼ同様に取り扱っているが、語り本系には、右に挙げたような頼朝の質問は見られない。更に延慶本の場合、生死の選択についての頼朝の質問には、宗盛は返答しない。この質問は宗盛に向けられたものであるにも拘らず、清宗の次の返答を引き出す為に記されているとさえ考えられる。

右衛門督宣ケルハ源平両家初テ朝家ニ召仕テヨリ以来源氏ノ狼藉ヲハ平氏ヲ以テ鎮メ平氏ノ狼藉ヲハ源氏ヲ以テ鎮ラル互ニ牛角ノ如ニテ候キ今日ハ人ノ上明日ハ身上ト思食テ御芳恩ニハ只トク頸ヲ被切ヘシト申セヨトソ宣ケル
「居直畏マ」った宗盛に対して、清宗は源平という武門の家に生まれた人間の宿命を堂々と述べたのである。

ところで、右の文脈に「帝王ノ御敵ヲ討タル者ハ七代マテ朝恩失セスト申事極タル僻事也目当リ故入道ハ法皇ノ御為ニハ申セハ愚也御命ニ代奉ルモ度々也サレトモ僅ニ其身一代ノ幸ニテ子息加様ニ罷成ヘシヤ」（第五末 八 重衡卿関東へ下給事）という言葉を加えたものが、関東下向の際、重衡が頼朝に対して述べた言葉になる事に注目したい。重衡の頼朝への返答はどの諸本にもほぼ共通して見られる記事で、頼朝と重衡・宗盛の対面が、重衡と宗盛の対照をも意識して描かれていると考えてよいであろう。清宗の主張は、重衡の主張と極めて近似した叙述で、重衡の主張から朝家の護りに努力

した清盛の事を取り去ると、清宗の主張が浮かび上がる。従って、延慶本では、少なくとも清宗の頼朝への深い言葉は、重衡の頼朝との対面の場面を強く意識して描かれていると考えてよい。つまり、宗盛と重衡とが、前節に考察した知盛と宗盛の関係と同様に對比されていると考えられるのである。それは、前節で述べたように、貞能の呼びかけが知盛・重衡に向けられた事と照応して、延慶本の宗盛と知盛・重衡を對比させる描き方の一貫性を示していると言えるだろう。

「第六本 三十四 大臣殿父子並重衡卿京帰上事 付宗盛等被切事」においては、対面の後、宗盛が再び都へ戻る事を「心得ス」思うのに対し「右衛門督計ソヨク心得ラレタリケル」として、清宗が、都で斬られる事を推測する言葉を記す。また道中「今ハ命生ナンスルヤラム」と安心感を抱き始める宗盛に対して「ナシカハ被生ヘキ」と念仏に余念のない清宗が描かれる。或は、斬首される直前に念仏を止め「右衛門督モステニカ」と口走る宗盛に対して、清宗は父の最期を尋ね、「目出タクオワシマシ候ツル」と聞いてうれしげに斬られる。

右のように、父子は一貫して対比されて描かれる。子息清宗への深い恩愛の情の為に生に執着し、最期まで妄念から逃れえなかつた宗盛像は、皮肉にも、その宗盛が心にかけて続けた子息清宗の、父親

思いでありながらも潔く武士らしい姿によって、よりその姿を鮮明にうきあがらされているのである。

おわりに

物語の人物の「対位法」^③が、単に一場面のみではなく、物語全編に互って意図的に構成されたものであろう事を、延慶本が最も明らかに示していると言えるだろうか。そしてそこに見える、宗盛像造型における構成意図をまとめるならば、宗盛は、まず兄重盛と並記されて、重盛と共に平家を象徴的に代表する人間として物語に登場し、重盛の死後は、その生前の重盛と対比され、人間的・政治的資質に劣る姿を露呈することで人々に平家の「世末」を悟らせる人物として描かれる。

また、清盛の死後、平家の総大将となり都落ちを決行した後は、智将知盛と対比される。あくまでも「思キ」る事を自身の生き方として武士らしく行動しようとする知盛と対比された宗盛が「示す姿は」「弓矢ヲ取習ヒ」を拒絶した総大将の姿であり、平氏一門を敗戦から滅亡へと導く人物として描き出されるのである。

そして、知盛が雄々しく壇浦に沈んでから後は、宗盛の横に配置されるのは子息清宗であった。又、東国下りという運命を共にして宗盛は弟重衡とも対比される。清宗の頼朝に対する潔い返答が、明

らかに重衡の言葉を意識して形作られているように、知盛・重衡と宗盛の対比は、清宗と宗盛の対比に受け継がれるような形で、宗盛の物語を進行させる。

以上にみられる形で延慶本は、宗盛を死の瞬間にいたるまで一貫して、各場面における徹底した人物との対比という構成と構想によって、描いているのである。

注

- ① 佐伯真一氏「重衡造型と『平家物語』の立場」(『国語と国文学』昭和六十年)
 - ② 生形貴重氏「『新中納言物語』の可能性―延慶本『平家物語』壇浦合戦をめぐる―」(大谷女子短期大学紀要第31号昭和六十三年)、「先帝入水伝承」の可能性―延慶本『平家物語』先帝入水をめぐって―」(『軍記と語り物』第24号昭和六十三年)
 - ③ 武久堅氏「平家物語研究の現状と課題」(『中世文学』第32号)、「シンボジウム」報告「平家物語研究の視角―昭和六十二年―」なお、近時、同氏は「滅亡物語の構築―平家物語の全体像―」(『文学』56巻3号昭和六十三年)において延慶本を統一した作品として読む作品を試みている。また山下宏明氏「延慶本平家物語の展開法―『平家物語』成立論のために―」(『文学』57巻1号昭和六十四年)も統一した作品としての読みを試みるものとして注目される。
 - ④ 渡辺保氏「宗盛(平家物語人間像と史実との対決)」(『国文学』解釈と鑑賞』第22巻9号昭和三十三年)
- 渡辺貞磨氏「平家物語に於ける人間像―宗盛を中心として―」(『大谷学報』第40巻1号昭和三十五年)

鈴木則郎氏「平家物語における平宗盛の人物像」〔『文芸研究』第45集昭和三十八年〕

⑤ 和田英道氏「宗盛像の再検討―覚一本『平家物語』における」〔立教大学日本文学』26巻昭和四十六年〕、「平家物語」人物像の形成―例えば宗盛の場合―〔同27巻昭和四十六年〕

川田正美氏「宗盛像の変遷―『平家物語』異本を通して―」〔日本文学』27巻9号昭和五十三年〕

桜井陽子氏「平家物語にみられる人物造型―平宗盛の場合―」〔お茶の水女子大学国文学』51号昭和五十四年〕

目黒須美子氏「平家物語」における宗盛像〔『宮城女子大学日本文学ノート』20昭和六十年〕

⑥ 山下宏明氏「平家物語論のために―物語と人物像―」〔日本文学』第30巻9号昭和五十六年〕

⑦ 武久堅氏「宗盛伝承の様式と平家物語の構想」上・下〔日本文芸研究』第38巻3号・4号昭和六十一・六十二年〕

⑧ 以下特別な場合を除き、延慶本を「延」、長門本を「長」、源平盛衰記を「盛」、四部合戦本を「四」、覚一本を「覚」、屋代本を「屋」、百二十句本を「百」と略記する。

⑨ 以下巻数の直後に意段名を記した場合の引用は岩波日本古典文学大系「平家物語」による。

⑩ 川田正美氏 同注⑤
⑪ 以下特記無き場合、この形式の引用は「延慶本平家物語」(古典研究会)による。

⑫ 延慶本では「義王」と記されるが、「祇王」が一般的であるため、特記すべき必要のない場合は「祇王」と記す。以下、人名に関しては同じ扱いとする。

⑬ 武久堅氏 同注⑦

⑭ 「父大臣殿勝公卿中見舍弟宗盛卿左衛門督御立」(巻十「熊野参詣」)「四部合戦本平家物語下」122左(『釈文 宇野』)

⑮ 水原一氏「延慶本平家物語」考―その古態性認識を中心に―〔『平家物語の形成』加藤中道館〕氏はこの中で延慶本のこの本文形態の古態性を指摘している。

⑯ 刑部久氏「平家物語」壇浦合戦の事―表現が意味性を増幅する時―〔『リポート笠間』第28号昭和六十二年〕

⑰ 「玉葉」(元暦年四月二十六日)では宗盛は浄衣を着すとあるが、清宗の服装についての記事はない。また、「吾妻鏡」では「各浄衣」とある。

⑱ 武久堅氏 同注⑦の下

⑲ 生形貴重氏「平家物語」の構想についての覚書〔大谷女子短期大学紀要第29号昭和六十一年〕

付記 本稿は、平成元年12月3日、関西軍記物語研究会第7回例会(於阪南大学)における口頭発表をもとにまとめたものである。席上貴重な御教示を賜った諸先生方に厚く御礼申し上げたい。